刊 讀 賣 新 聞
（第3種郵便物認可）

日本史アップデート

日蓮

ここに注目！

・鎌倉時代、日蓮宗を開いた日蓮は、過激な言動のイメージが強いが、相手を気遣い、優しさにあふれる一面があったことが、残された手紙から判明している。手当たり次第に他宗や為政者を攻撃したわけではなく、豊かな学識を下敷きにした上での批判だった。

・「立正安国論」の執筆のきっかけは、浄土宗に対する鎌倉幕府の手厚い支援ぶりを見てわいた反発心だった可能性がある。日蓮は他宗批判に激しい言葉こそ使ったものの、敵対勢力に自分から暴力をふるうことはなかった。

・日蓮の思想は、本人だけで作り上げたものではなく、弟子や後世の信徒たちも一緒になって作り上げた、集団的な創造の営みと見ることもできる。

暴力頼らず優しさも

日蓮と言えば、法華経信仰に基づき他宗派を激しく批判するなど、攻撃的なイメージが強い。だが様々な研究からは、信者を思いやり暴力に頼らないなど、別の側面が浮かび上がる。

末木文美士・国際日本文化研究センター名誉教授(75)は、日蓮が誰彼構わず牙をむいていたわけではなく、「若い頃に比叡山などで学問を積み、幅広い思想を吸収した上で他宗派を批判したことは見落としてはならない」と指摘する。例えば、「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」の四箇格言は他宗派批判の象徴とされるが、法華経の題目を唱えることが、他宗などのあらゆる真理を含んでいるという教学的根拠を確立したから唱えられたと説明する。

鎌倉幕府執権を務めた北条時頼に献上した「立正安国論」では、地震や飢饉などの原因を、権力者が正しい教えの法華経をないがしろにし、「邪法」の浄土宗を採用しているからだと訴えた。山形大の松尾剛次名誉教授(70)は執筆した理由について、「建立中だったとみられる大仏や念仏の興隆ぶりを鎌倉で目の当たりにして、幕府に手厚く保護される浄土宗への、強い反発が芽生えたからではないか」と語る。

●

その後、中国・元が接触してくると、立正安国論に記した「他国の侵略」の予言が的中したと考え、幕府に法華経を大事にするよう再度働きかけるが、受け入れられなかった。他宗批判は過激化し、「諸寺を焼き払い、諸僧の首を斬れ」と言ったなどとして、行敏という僧から悪口の罪で訴えられた。その訴状を分析した松尾名誉教授は、「佐渡配流が決まって捕縛に来た武士の前でも同じことを言ったと、自著でも書いている。少し言いすぎだ。佐渡配流は『法難』とされてきたが、当時の裁判手続きを踏んだ、正当なものだった」とする。

●

一方、過激な言動で襲撃などを受けるのは、常に日蓮の方だった。末木名誉教授は「日蓮側から暴力をもって攻撃することはなく、決して暴力主義者ではなかった」とする。

日蓮が信者らに出した手紙を見ると、こまやかな気配りや優しさといった別の一面が浮かび上がる。日蓮の手紙は真跡、写本など約340通も残っており、鎌倉仏教の他の宗祖に比べ圧倒的に多い。相手に応じて文体や表現を変え、教義上の問題だけでなく、プライベートな状況にも踏み込んでおり、内容も幅広い。

〈をとこ（夫）のしわざはめ（妻）のちからなり。いま、ときどの（富木殿）のこれへ御わたりある事、尼ごぜんの御力なり〉

子連れでしゅうとめのいる武士と再婚し、病気がちな女性には、夫（富木殿）が身延山（現在の山梨県）の地までやって来られたのは、あなたがしっかりしているからなのですよ、と呼びかけ、肩身の狭い思いをすることはないと伝える。

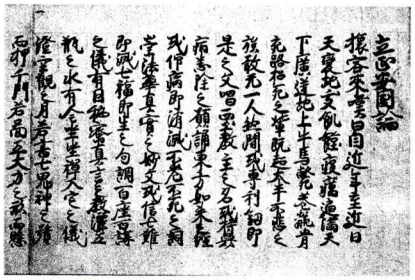
主君の覚えめでたく、同僚にねたまれている信徒の武士には、夜の酒宴を避け、飲むなら女房と飲むよう指示。松尾名誉教授は、身延山で過ごした晩年に「手紙による布教を行っていた」とし、「それまでの仏教にできなかった、信者に寄り添う姿に注目していくべきだ」と強調する。

なお、日蓮が書き残したとされる手紙などの文章「遺文」は、すべての真偽が確定したわけではない。このためどの遺文を参照するかで日蓮論は変わる。末木名誉教授は、「真偽にこだわり続けると水掛け論に陥る」と指摘。日蓮の思想は本人で完結するものではなく、門流も巻き込み、「集団的な創造の営み」として発展してきたのではないかと提起する。そして「現世に積極的に関わり、題目を唱えれば普通の人も仏の力を発揮できるとする思想が、多くの人をひきつける魅力と、教団のエネルギーの源泉になった」と話している。

（小林佑基）

日蓮の生涯

1222年	安房（現在の千葉県）に生まれる
1253年	立教開宗を宣言
1259年	「守護国家論」を記す
1260年	「立正安国論」を記す
1261年	伊豆（現在の静岡県）に流される。63年まで
1271年	佐渡（現在の新潟県）に流される。74年まで
1274年	身延山（現在の山梨県）に移り住む。元寇（文永の役）
1282年	武蔵（現在の東京都）で死去



「立正安国論」の控えの真筆（国宝）＝千葉・法華経寺提供

参考文献　末木文美士『増補　日蓮入門』（ちくま学芸文庫）、松尾剛次『日蓮』（中公新書）、田村芳朗『法華経』（同）、日蓮『日蓮の手紙』（植木雅俊訳・解説、角川ソフィア文庫）、末木文美士編著『日本仏教再入門』（講談社学術文庫）